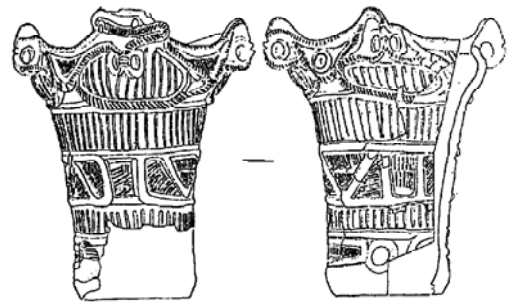


手に関連する3つの問題を解明するのが本研究の目的である。

3つの問題とはまず、蛇体把手付土器の用途である。蛇体把手を考える上で、なぜ蛇を把手として土器に飾ったのか、そして、何に使われていたのが最大の問題となる。この問題について当時の人々の精神世界なども踏まえて考える。次にミミズク把手との関係である。ミミズク把手は、一般的にはミミズクもしくはフクロウの顔をモチーフにして作られた把手だと思われてきた。しかし、武居幸重は「従来、ミミズク把手と呼ばれていたものは蛇頭の模式的表現であると考えられる。」と主張している。もし、蛇頭だとしたら、蛇体把手と何らかの関係があるはずである。そこで、ミミズク把手も同時に分類することによって関係があるかどうかを検証する。3つめが顔面把手に伴う蛇体表現についてである。顔面把手の裏側には必ず蛇体のような表現が伴っているというのはかなり前から多くの研究者によって指摘されてきたが、指摘するだけに留まり、現在までそこから一步踏み込んだ研究はされていない。そこでこの問題についても考えてみたい。

方法としては、まず対象地域の遺跡から蛇体把手や、蛇体把手と思われるものをすべて拾い上げ、その後、土器の形式と比較しながら分類・編年を行った。



蛇体把手付土器（花上寺外遺跡）

中部高地における蛇体把手の編年

小坂 寛之

縄文時代中期に関東・中部地方を中心にしてマムシを象ったと思われる蛇体把手が土器の口縁部に付けられるようになる。

本研究では、八ヶ岳山麓を中心とする中部高地の縄文時代中期、藤森栄一が『井戸尻』の中で分類したいわゆる「井戸尻編年」でいう、中期初頭の九兵衛尾根 式から施文される文様が衰え、器形にもバリエーションがなくなる曽利 式までに限定して蛇体把手の分類・編年を行う。そして、最終的に、蛇体把

そしてその編年に従って、最初の3つの命題について考えてみた。その結果、蛇体把手の用途としては、煮沸器、蒸器、貯蔵器、祭祀器が考えられるが、蛇体把手を分類・編年することで、土器内部に炭化物が残されているものが非常に少なく、蛇体把手が煮沸器や蒸器に使われていたのではないことがわかった。しかし、貯蔵器か祭祀器かを現段階では確定することはできなかった。次にミミズク把手との関係である。今まではその形態からミミズク把手と呼ばれ、貯蔵器の口縁部に付

いて、夜中ネズミから土器内部のものを守る、
などと考えられていたが、蛇体把手とともに
分類・編年することによってその発生期まで
遡り、蛇体把手とミミズク把手の祖形が同じ
ということまで突き止め、それ以後の発達の
仕方を検証しながら、ミミズク把手が蛇頭で
あるという結論に辿り着いた。

顔面把手に伴う蛇体装飾に関しても、ミミ
ズク把手が蛇頭だという考えに基づいて進め
た結果、顔面把手に伴う蛇体装飾は後から付
けられたものではなく、もともとは蛇体把手
だったところに後から顔面が付けられるよう
になって、蛇頭・蛇体が把手の外側に後退し
たために顔面の裏に付いているように見られ
ただけであり、最初から頭髪の表現として現
れていたのではないことがわかった。